

ス軍の基地のあた街でそのせいか今もイリス風の庭のきれいな家が
たくさんある。十字路のところでバスをおりて、-300. マンゲールミューズ
とセドを買って食べる。これが昼食になってしまった。(Nowshara は、
シヤラと発音する様だ。ベンチが置いてある広場の木かげにいたラ
ずいさま人相ができてしまふ。どこに行っても外国人は珍らしい
者の様だ。Ramazan中なので我々が飲食しているのをとが
める様な目つきで見ろ。

MardanまでRst, バスは木粒の中や、カウキビ畑の中を走る。
Kabul川をわたって鉄道もここ奥まで入っている。Mardanでミン
ゴラ行のバスに乗りかえて再び北へ向う。かんがい用水、ダム
のある所から峠の登りにかかる。400~500mほど登り、1000~200
mほど下るとSwat谷に入った。谷一面が緑に包まれて、山にも上
の方は木があり豊かな谷である事がはきりしている。スカルドか
ら、Khapluにかけてのパキスタン風景とは全くちがう。日本の田舎
の様な感じである。

Mingoraの午前で500頃に客も運ちゃんも、木ノリ、西の日
の光に向って、うしろから写真をとっておく。

Mingoraは緑に包まれたSwatの州都。山の午には
白いモスクや城があり、予想以上に大きな町でびっくりし
てしまふ。町中のAbashind Hotelに入る。一夜Rs30-(定)
Ghulam Rasoolが支配人。Ramazanがあげるので待ちかねる
様にして、ナンとミンチと佐の蒸こ3かしの夕食。食後3人で散歩
ミニミニバスを960でKalamまでチャーター。明日、6:00にHotel
に来る様伝えておく。アイスクリム屋がいて、ソフトクリムを食べて
イタリア製のソフトクリム製造機をもっていた。甘いカルブサを
Rs3-で買う。半分食べてしまった。シヤラが気持良い。

④

Shervi Kangri 登頂記. 1976-08-10

見通す限り雲一つない好天。風は少しあった。朝は良く冷えて
4:00で-16°Cであった。C3の小さな青いテントは三エルトの
肩にへばりついてゐる感じで、緒方とたった二人、この天上の世
界に一夜を過すといふのは我人生にてたった一度味知える
チャンスかもしれない。

オシキャンポ建設までは実に長い間であった。西稜にルト
を決定し、西稜取付きから氷壁となり、P9突破まで、頂上
への見通しはたっていない。6500m以上で行進した隊員が
田中、井上、緒方、居谷、木本の5人だけという段階で、7月末の
悪天に会い、A,B,Cまで下降して休養せざるを得なかった事
を思えばC3に2名が入った事は、実に大きな出来事の様
に思われしかたがない。C3からP8台地までしか進めなかった
8月8日は、気分も次いで頂上への道に、沫の不安すら抱いた
が、9日、良い天気の中、順調にルト工作を進んで6800mに
C3建設を完了した時は、何も考える必要がなかった。天
命を待つのみといったところだった。

9日、2時半、最終サボト隊の田中、木本、居谷、広谷の4名は、ルト
が完成した後、C2へ下っていった。田中副隊長の消耗激しく、今日
の荷上げのきつさが良くわかった。テント内を整理し、まず蒸
でもと言う事で、このキャンポのみ使用する事となった。テントで紅
茶を作った。湯が低いせいか、薄いつやいになったが、とてもうまい。
疲れが、木登ってきたつもりだが、ザル登攀用具、何人装備
を持ってのルト工作はやはりきつかった。二人とも、高度の影響
はあまり受けていないが、やはり疲れは大きい。夕食をとり、
イチャ、チヤートを含べてやっと元氣も回復した様であった。
pmb:00の交信にて、明日のP7,7は朝からトランシーバーをON

にして、アタック隊がいつでも交信できる様に準備してもらう事と、悪天ならC₃にて頑張るので、酸素と食料の荷上げをお様依頼。明日の幸運を祈って交信を断った。

当初の計画から6800mの最終キャンプから酸素を睡眠用に使う事になっていた。さっそく準備する。二人のまくら元にポンペを並べ、一本に不凍液を給油したレギュレーターをsetする。二人で1ℓ/minの酸素を計算では10ℓ吸える事になっていたが、NO.14のcylinderは、BCにて少しテストした事もあるが、135 kg/cm²を指示していた。マスクは口と鼻用のものを下を使って二人に分配し0.5ℓ/minずつ吸う様にし、たばこを一服してから、それぞれのシュラフに入った。Doctorの見解では、2ℓ/minで5hよりも1ℓ/minで10h使用する方が効果が大であるとの事。0.5ℓ/min/manは、5000mの高度の酸素濃度に相当するので、よく高度順化しておれば、十分に効果があろうという事だった。

実際、シュラフの中で、マスクをつけておれば、息苦しくて強い深息を吸うという事もなく、寒さも感じず、手足の先まで血流のあるのが感じとれるほどであった。7:00頃と二人はおちついて、ねむりにつこうとした。しかし、興奮のためか、酸素マスクが危くなるためか、おつく事ができず、うとうとするだけで、どんどん時間がたってしまった。緒力も2時間ほどはねむった様であるが、9時過ぎ、二人とも一度起きてたばこを吸った。風が少しある様だが、月明りの良い天気。内張はあがり、息の花が咲き、ラテルネの光の中でキラキラ輝いていた。それから全く目もさえてしまい、シュラフの中で規則正しくポンペから供給される酸素を肺の奥深く吸い取る作業を続け、時間が過ぎてゆくのを待つだけであった。もう少し流量を増せばねむれるかもしれないが、2ℓ/minに10:30頃UP

したが結果は同じであった。それでも酸素の効果は大きく身体は十分に休まっている様だった。

アタックの朝は、2時起床、4時出発と前日決めていた。1時40分、もう起きてもいいだろうと思ひ、シュラフから飛び出してテントの外へ出る。星がいっぱい、月も明るく、今日は一日良い天気だなどと確信する。気温は-15°C。緒方も起し、もういいだろう、出発準備をしようという事になった。流量を増したせいもあるか、酸素ポンペもちょうど一本空になったところだった。

アタックの朝食は、雑煮。このキャンプの高度6800mでもちうまきもどり、腹もちの良い朝食を供給してくれた。燃料は、プロパンとブタンを使用した。プロパンは、70ℓの0.8kgポンペ直結式にナーを高所用とした。キャンプではバルブ全開にすると、さすがに不完全燃焼をするが、火力も強く、カーボニヤ、悪臭のない良いものだった。ブタンも、快調である。さて、緒力と二人、たぶりと、ファイのみ、装備の点検に移る。ガソリンを一担空にして、必要なものを詰め、一部は身につけてゆく。頂上用品として、ハロキスタンと日本の国旗、採水ビン、フィルム6本、カメラetc. 二人に分けて、ガソリンにつめる。登攀用具は極力少くする様に、ガソリンは8mmと50mmだけ持っていく事とした。幸運いから、アイスバイルが一本しかなく、一本はアイスハンマーとした。8mmのガソリンは、下降の時のマフガンも考えて、50mm持っていく事とした。服装は、ニッカーズボンをやめて、キルティングの高所ズボンをはき、上はセーター、ヤッケに、赤の高所帽をつけた。緒力は、ニッカーの上に羽毛ズボン、ヤッケといひでたちである。4時テント内での準備も終り、二人して、テントの外へ飛び出した。

月明りの中、アイスハンマーをしっかりと結びつけ、マニゲイルンをして、

いは出発である。4時30分、肩の岩壁の下右上の堅雪の稜線に向って緒方ト、7°で出発した。約一時間で、コンティナスでキルクステ、7°をきかし、肩の右上に出る雪の斜面に出る所に達す。高度6900m、初め交信をC₂とす。中村氏の声ははきり入ってくる。ICB170トランシーバーはヤ、ケのホウトに入れているので、電池が冷えて使えなくなる事はない。平井先生の伝言が入る。「大胆にしてかつ慎重な行動せよ」という事^{*1}。ここまでは、肩の岩と、小さな雪稜の間の岩混りの雪壁を登ってきた。傾斜も45°ぐらいで雪が良く快調に進んだ。雪稜が肩の岩壁に突き当たる所は雪の小さなテラスでここから肩へは10mほどの高さの岩が~~左~~に広がっていて、ちょうどテラスから右へ2mほどの所が登れど~~ろ~~、~~上~~に雪面が見える。緒方はここを登ろうと取付いてみるが、~~強く~~ハケンが打てず、けさく一枚ハケンを落しておきらぬ。確保のハケンは良くあっていたが、ここはC₁のあたりまでは切り切れていて、高度感十分のところ。空は急速に明るくなってきたが一日のうちで最も冷える時間。2人とも足先の感覚がなくなっていた。

※も一件は、頂上の石を10個以上持ち帰りという事であった。

結局この岩は雪面とのコンタクトラインを右に20mほどトラバースして、右側の雪壁に出て上部の稜線に出るルートをとった。50mのガイル-はいで、緒方の後を追う。そのままさらにガイル-はいで登り、肩の雪稜に出る。7:00、どうも腰をおろしてゆくり休む。もうおぶん高くて登った所なのに、高度計は6900mから少しも上に登らない。この時はまた高度計の調子がおかしい事に気づいて、いまだ400m以上も登らねばならないと考えていた。再度交信をし、サホトの中村、尾谷がC₂を出発し、C₃へ向った事を知る。サホト隊もトランシーバーを持っているので今後

も適時交信ができる。C₁から肩の雪稜は右上の直線的なり、ジに見えていたが、実際には複雑に雪庇が出ている。頂上岩稜の基部までさほど、それもなく、緒方ト、7°で進む。ちょうど朝日が、頂上岩稜の左側のコルから射ってきて、少し体も暖かくなる。雪煙がミアテン側から吹き上げ、太陽の光をファンタスチックに散花させてキラキラと美しい。ルートはちょうど朝日の射す方向へ、コルを直射して一直線だった。この頂上岩稜は、正面がフェイスになっていて、とても取付けようもない。C₁、C₂からの偵察でも、最も心西していた部分だった。しかし幸運にも、このコルに登りつくと、裏側すなわち、三ツツの二峰から、吊尾根がちょうどこの岩稜部に続いているのではないかと、そこは広い雪面となって、カベリ氷河側に落ちている。100~200mの高差の広い沢となっていて、それから絶壁となり、カベリ氷河へ落ちている。岩稜の裏側ももちろん雪が、あるいは雪庇となり、あるいはice cakeとなって、頂上のオハーフの雪稜を形成していた。風がずいぶん強く、地吹雪となって上空へ吹き上げていた。岩稜の最初の三角岩峰は、裏側のエカブラの登った雪面を50m程登り、雪庇と、ice cakeの間の台地へ出た。この雪穴で、風をさけて、タバコを吸う。交信を試みるがさすがに北面に入るとはい、できません。am 8:00、少し休んですぐに今度は井上ト、7°にて三角岩峰(5峰)と4峰のコルから雪稜に出、おとしたナイフエッジを20m程登り、幅の広い快適な雪稜上に出た。キバまでおと見通せ、ラグのJの上を行く様に2つほどヒョクを越す。雪は比較的締り、アゼンにもつかず、一歩一歩踏みぬいて頂上へ近づく。4峰と、いってよいだろう。C₁から見た小さなNeedle Peakは、雪稜から南側へはずれて、人の高さぐらいに突き立っていた。

3峰は、小さな岩峰でここから頂上南面の氷田へ貫け出す事ができた。簡単に2峰すなわちキバの根本に出る。少し下降気味のトラバースである。キバは、台石の上に毛柱を立てた様なかこうで、稜線からシエルピラのアイスフィールド側に外れてフタっていた。つるつるの一枚岩でリスすら見つからない。キバのユルで休む。緒方、休もうか、という事で、一ふくする。交信を試る。幸いC₁が入ってきて、つる谷、バラサーブと話す事ができた。「あと30分で頂上に着きます。」キバが良い風よけで、このユルは良い休み場だった。

いよいよ頂上へ「緒方、若い方が先に行くものだ行けよ」という事で、あと50mの登りにかかる。岩が3つほど頂上の高みを囲んでいた。左のすきまを通って簡単に糸巻頂に出る事ができた。8月10日午前9時15分、ネキキャンプから4時間45分のマタ、7だった。手袋を外して緒方と堅い握手。ああやって終わったなあという感じ。トランジバーを出して、C₁に報告「今頂上に着きました。見はうしが良く、キバの方が少し高い様です。車を上げるとこちらの方が高くなるほどです。」「キバは登山杖のようにありません」「それならもういいだろう。そこを頂上としていいだろう。そんなやり取りをした後、国旗をピッケルに付けて写真を撮る。緒方にまず持たせて、カルトロ、ニヤフェンをバツ7に、フィルムに収める。井上も交代して、写真に収める。あと重い目をして持ち上げた200mmの望遠レンズを使ってパノラマ写真を撮り、紅茶をすすり、木本の依頼があった頂上の雪の採集をすませ、ネ次隊の隊員と二次のそめ、そめ2登頂の日時と、神代学遠征隊名を記した紙をピッケルに入れておいたものを、緒方が頂上に握めた。10時10分まで約1時間頂上にいた。

頂上は Shacken から吹く風が冷たかったが、360°廻れた制限り雲も霧かすみも無いすばらしい天気です。遠くナガ、ハルバット、ヤ、バツラ、ヌクン、サセルカンリまで見通す事ができた。ユルゴンドス谷は、村の縁が井戸の底の様に深い谷間に美しく見え、下B、C、ABCあたりも良く見える。

再びキバのユルへもどり、ここで大休止。みかんの缶や、ビスケット、チーズ、フリン、etc ナサードの緒方が準備した、マタ、7食をゆくりと食べる。頂上では忘れていたタバコも吸う。例の頂上部の小石は、二人で20個ほどザックに入れたので、もう頂上に思い残す事はなかった。テルモスのチャイも終わったので、ストーブも持っている事だし、ここに捨ててしまう事にする。サボイ隊と交信でき、P、Qを越して、ナマズのユルにいる事を知る。区も帰ろうか、40分ほどで肩までコンテマスで下降する。4峰のユルまではペースもきれいに残っていたが、5峰のトラバースの部分はもう風に吹き消されていた。肩の下降は、緒方ト、7で1カット。スノーバー一本を20mほど下降した所にたたき込んでもらう。安全を計る。トラバースが最もいやな部分だったが、登るときステップをきちんと作っておいたので比較的、安全に雪のテラスまで帰る事ができた。C₃のキャンプには、サボイの中村、辰谷がちょうど到着し、我々を囲んでいた。そこから50mのガイルで3ピッケル登りとはちがう。安全のためハルケンも打ってマニットで慎重に下降する。もしスノー7でもしたらいいんだ。最後のマニットは、緒方にガイルをfixさせ、C₂の急斜面を下降し、5m程、ガイルを切ってマニットに直し、C₃へ帰着する。13:00 天気に恵まれたすばらしいマタ、7だった。

C₃での最後の夜はすばらしい夕日に包まれて暮れていった。